

第6回三重大学教育学部外部評価委員会次第

1. 開催日時 平成17年11月25日(金) 10時30分～16時20分
2. 開催場所 三重大学教育学部専門校舎1号館4階「大会議室」ほか
3. 評価項目 教員養成の在り方 - 教育内容を軸として -

4. 会議次第

1) 授業公開(11:00-12:00)

2) 昼食及び懇談

3) 外部評価委員会

・開会の挨拶(13:00-13:05)

・委員紹介(13:05-13:15)

外部評価学外委員

山口典郎	三重県教育委員会研修分野総括室長
田中彌	津市教育委員会教育長
川北欣哉	四日市市教育委員会教育長
水越利幸	三重県高等学校長協会会長
坪井守	津市立養正小学校長
山口悦子	三重大学教育学部同窓会代表

三重大学関係者

丹保健一	教育学部長
伊藤彰男	教育学部副学部長
東晋次	三重大学評議員
本田裕	教育学部自己点検・評価特別委員会委員長
中島喜代子	教育学部自己点検・評価特別委員会副委員長
上垣涉	教育学部学部長補佐(地域連携・附属学校担当)
早瀬光秋	教育学部学部長補佐(国際交流担当)
藤原和好	大学院教育学研究科専修代表者会議議長
米川直樹	教育学部附属中学校長(附属4校園代表)

・概要説明(13:15-13:45)

三重大学概要、三重大学教育学部案内

教育活動

・座談会(13:45-15:10)

・学外委員による評価のまとめ(15:20-15:50)

・学外委員による講評(15:50-16:10)

・謝辞、閉会の辞(16:10-16:15)

・閉会

第6回三重大学教育学部外部評価委員会記録

評価項目「教員養成の在り方 - 教育内容を軸として - 」

【丹保学部長】第6回の外部評価委員会を開催したいと思います。

最初に教育学部を代表いたしまして、私からごあいさつを申し上げたいと思います。

本日は、ご多用中のところをいろいろと面倒な、こういう外部評価の委員としてお引き受けくださいましたこと、心よりありがたく御礼申し上げます。外部評価は内部の人間だけではなかなか気付かないようなところを、外部の方の目からきちんと評価をしていただいて、それを学部の、また大学の今後のあり方に役立てていこうという、そういうことで始められたのであります。

今回のテーマは、このお配りした中にも入っていると思いますが、「教員養成の在り方 - 教育内容を軸として - 」という、こういう内容で評価をお願いしたいというふうに思っております。もちろん、このテーマから多少外れても構いませんので、せっかく現場のほうでいろいろと実績を上げられている先生方や、また教育行政のほうでトップに立って指導されている先生方のご臨席を賜っておりますので、これ以外のテーマについてもいろいろとご指摘を頂ければというふうに考えております。

他の様々なことについては、また後ほどいろいろご説明いたしますけれども、この間いろいろ皆さま方からご指摘していただいたことを私たちとしては、これまでの改革の中に生かしてきておりますので、今回もそのような気持ちで皆さま方の一言一言をしっかりと受け止めて改革をしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

では、ごあいさつといたします。

それから、今回の会の司会を教育学部の中島先生にお願いしようと思っておりますので、ご了承のほどよろしくお願いいたします。

【司会・進行 - 中島自己点検・評価特別委員会副委員長(以下 司会 - 中島)】 ご承諾いただきましたので、司会・進行をさせていただきます、中島と申します。よろしくお願い致します。

では始めにですね、委員の紹介から進めさせていただきます。学内委員並びに事務方について紹介をさせていただきます。

まず私、司会をさせていただきます自己点検・評価特別委員会の副委員長の中島でございます、よろしくお願い致します。

【東評議員】 評議員の東でございます。どうぞよろしくお願い致します。

【伊藤副学部長】 副学部長の伊藤でございます。どうぞよろしくお願い致します。

【本田自己点検・評価特別委員会委員長(以下 - 本田委員長)】 自己点検・評価特別委員会の委員長の本田です。よろしくお願い致します。

【藤原大学院教育学研究科専修代表者会議議長】 大学院の専修代表者会議議長の藤原と申します。よろしくお願いいたします。

【上垣学部長補佐】 地域連携および附属学校担当をしております、学部長補佐の上垣と申します。よろしくお願いいたします。

【早瀬学部長補佐】 国際交流を担当しております、学部長補佐の早瀬光秋と申します。よろしくお願いいたします。

【米川附属中学校長】 4 附属校園を代表しまして、現在附属中学校の校長をしております米川です。よろしくお願いいたします。

【司会 - 中島】 引き続きまして、学外委員の先生方からお願いいたしたいと思いますが、山口先生のほうからよろしくお願いいたします。

【山口（典）委員】 三重県教育委員会の研修分野の総括室長の山口と申します。よろしくお願いいたします。

現在、研修分野のほうは総合教育センターを中心にして、教育委員会の中へ数年前から入りまして、現在、県の方針の中で、特に研修について教員の質の向上ということで、研修分野が任されているところが多くあります。特に学校 5 日制と兼ね合わせまして、教職員がその研修の中でなかなか出て行くことができないということで、特に現在、研修分野のほうでは「ネット D E 研修」、いわゆるインターネットを使った研修とか、それからあるいは各学校で O J T といひまして、いわゆるオン・ザ・ジョブ・トレーニングをちょっとひねった形なんですけども、学校で先生方が先輩の先生方から教えていただくというふうな形をとっている研修があります。

ただ、この O J T の中核になる、教えていただく先生方がいる場合はいいんですけども、いない場合はそれぞれにこちらから紹介をして、それぞれの研修の場へ派遣していく。紹介をしていくという形の中で、去年だけでも 300 校へこちらから行かせていただきました。それで、非常に盛り上がりやニーズが高くなって、今年は 300 校を超えて、ちょっと予算のほうも大分足らなくなってきました、補正をしてもらうような形になっています。特にこれは、前の教育長と話してる中で、団塊の世代が退職したらどうするんだということをもとに、こういうふうなことを考えさせていただいたという経過があります。

それからもう一つ、センターだけで大名商売みたいに今まで研修をしていたのですが、そんなことをしていたら先生方の質は上がらない、ということでこちらから出前で各地域の研究所等と連携をしての講座や、それから自分のところだけで独自に出て行く講座等で合計 100 講座くらいしております、センターの講座の約 4 分の 1 が現在、出るような形での研修体制をとっております。

そういった点で今、言われている教員の質の向上を三重大学さんとも連携しながら、今後やっていかなければいけないというふうに私どもも切実に感じておりますので、今日は来させていただいたわけです。よろしく勉強させていただきたいというふうに思っております。

ます。

【田中委員】 津市の教育長の田中彌と申します。教育長になってから7年目になります。三重大学は三重大学学芸学部を卒業しました。7期生ということです。

昨年11月に教育学部との間で、津市の教育委員会が協定書を結ばせていただいて、それがきっかけでいろいろといい勉強をさせてもらっております。上垣先生の仲立ちで市内の学校は大分変わってきたということをひしひしと感じているところでございます。これが間もなく合併ということで、1月以後は、現在、小中学校の数は合わせて31校なんですけれど、合併すると77校になり、幼稚園も含めると124校園になるという、そういう大変な数になるわけです。そういう学校をまとめ高めていく、合併して何が良かったかと言うとやっぱりレベルアップだろうと思います。そういう面でも今後いろいろとご指導を賜りたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

【川北委員】 四日市市の教育長の川北でございます。田中教育長と違いまして、私はまだ駆け出し者でございます。この外部評価委員にということで、当時気楽に分かりましたと言いましたが、今ここへ来てみますと、本当に良かったのかなと反省をしております。

小中学校におきまして、やはり今、評価、外部評価、自己評価、こういうものを取り入れた中で、学校経営をやっていく。こういう時代に入ってきております。

私どもとしまして、小中学校の学校経営方針と、こういうものを作った中で学校経営をいかに今から新しい時代に結び付けていくかと。ということで今、各学校を回りながら校長先生方とも意見交換しながら、学校経営のほうに携わっておる。ということで今、努力をしております。

今ちょうど来年度予算の編成時期でございますけれども、今の景気の中で非常に財政的には苦しいものがございます、なかなか新しい事業に手が付けられない。前年度の事業を何とか横ばいでも引き継げたらと、こういうふうなことで、今予算編成に苦勞しております。どうかいろいろご指導を賜りたいと思います。よろしく申し上げます。

【水越委員】 失礼します。津高等学校の水越でございます。ここには、高等学校長協会ということで参りました。

三重県下の学校では、総括のほうからお話があったんですけれども、学校経営品質をやっていきます。現在は試行ですけれども、それとその年度の改革方針。うちの学校はどうするか、長期で見たらどうするのか、本年度はどうするのか、というふうな数値目標を示しながらやっています。

また、各学校とも評議員制度があるわけですし、年に2回ほど集まるわけですが、なかなかうまく作用していないのかな、とも思っています。

現在、三重大学さんとこの夏に高大連携、これを大きく立ち上げていただきました。本当にこれはありがとうございました。時期的にテーマをいただいたのが遅かったこともありまして、子どもたちに言っても夏休み期間中の計画がされているということで、うまく

いかなかった。けれども、少人数でも開講していただきまして、本当にありがとうございました。

これは教育学部ばかりじゃなくて、全学部さんをお願いをして対応していただきました。来年度もそれを続けていただきたいと思っています。全国の校長会でも聞きますと、ほとんどの県で高大連携をやっております。三重大学さんが中心になって、三重県の高等学校全体と連携をしていくことが一番いいのかなと、こう思っております。それをもうちょっと続けていくと、北勢地区にも伊勢の方にも大学があるわけですので、その大学とその地域で連携をしていく、こういうやり方が一番良いのかなと思います。その核になっていたのが三重大学さんかなと思っています。勝手なお願いではありますが、よろしくお願ひします。

それに絡めて大学の先生方が大変忙しくなっているのでは、と思っております。1つには、出前事業というのをやっていただいておりますので、それも大事にはしなきゃならないかとは思ひんです。けれども、それも精査をしていく必要があるのではと思ひます。

私は、高等学校の2年生を中心として夏休み期間中に三重大学のキャンパスで勉強する。子どもたちがそういう経験をすることによって、三重大学に集約していくということが理想かなと思っております。その点をご理解願ひたいと思っております。

【坪井委員】 失礼いたします。津市の養正小学校長の坪井と申します。よろしくお願ひをいたします。

私は昨年まで、津市の教育委員会、田中教育長の下でいろいろと市の教育行政に関わらせていただいて、15年ぶりに学校現場に戻ったわけですがけれども、随分と津市の学校というのが活気付いて来ているなど、自分自身が学校現場へ行ってすごく体感しました。

それは、1つはやっぱり先生方です。これは変わらなければならないんだな、というそういうお気持ちを非常に職員会議とか研修会の中で、言葉の1つ1つにそういったものを感じているところです。ですから、保護者とか地域の方に向かってどう子どもたちを育てたことを見せていこうかという、そういった発言も多く見られるようになりました。ですから、本当に教育というものは特効薬というものはないかもしれませんが、1つ1つ打った施策がジワーッと効いてくるんだなということをつくづく感じました。

それから、「教育は人なり」ということもあらためて感じたんですけども、今、三重大学の学生さんを4名ほどお預かりしております。どうも学校には学生さんをボランティアで利用したら良いという、そういう感覚が若干あるように見えたんです。学校に来てくださる学生さんからは、来年度以降、実際教員になったらどうしようという不安もかなり抱えているということで、そういったご相談も受けます。そういったことに、少しでも学校現場でも応えていかなければならない。それがギブアンドテイクの関係かなということで、そういう学生さんをお預かりすることで、先生方も周りも育っていくということで、先生方のお力も今、出していただいております。

それと、初任の先生が、割と少ない教職員数にしては2名おります。その初任の先生を育てるということで、周りの先生方がこれまで持ってこられた実績なりをかなり出し切って育てていただくことで、相乗効果といいますか、中堅の先生方も随分自分の教育実践を振り返る良い機会になっているということです。校内での研修というのがすごく先生方の力量アップにつながっていくんだな、ということをお自身も体感しております。そういった意味で、養成とか採用とか研修という段階があるとは思いますが、養成段階に十分力を注いでいくことが大事だな、というふうに最近感じております。今日は勉強させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

【山口(悦)委員】 失礼いたします。同窓会の代表ということで参りました。20期卒業の山口と申します。よろしくお願ひいたします。

私が入学したのは一般教養校舎が建った時代でございます、周りの木々も随分背が低かったんですけども本当に大きくなり、また校舎もどんどん建ちまして、当時と比べますと大きな変化がみられます。私は初任が附属中学校でございます、現在、南立誠小学校の校長として勤めさせていただいております。

実は、一昨年の同窓会の総会に参りまして、その後のパーティーで学部長様とお会いしました。そこで、この頃随分荒れた学校があること、そういう中で子どもたちにどのように対応していいのかわからないという先生方がおられ、心に悩みを持ちながら、という方がこのごろ増えていることをお話させていただきました。

昨年まで私は、三重県警少年課で少年サポートセンター長という職に参りました。県警の中におりまして、補導活動でありますとか、あるいは支援。非行に陥った子の支援、あるいは被害を受けた子の支援。あるいは啓発活動等、そういったことを統括する場所におりまして、そんなお話をさせていただきましたら、学部長様のほうから、ぜひ警察のほうとも連携をして、学生たちにそういう現場を見せていただいたらどうだろう、というご提案をいただきました。それで今、ユースパートナーという形で警察、特に少年サポートセンター補導員と大学生と一緒に活動しながら子どもたちの補導に出掛けたり、あるいは夏休みに補導した子の学習支援をしていただいたりとか、そんな形でいろんな子どもに出会ってもらうというそういう機会をつくらせていただくことができました。

今現在、私は南立誠小学校なんですけれども、私の学校には7名の三重大学生が教育アシスタントという形で来ていただいております。本当に今来ていただいている7名の学生さんは真面目ですし、そして真摯に教育に当たろうというその気持ちが伝わってくるような子どもへの接し方をさせていただいております。ですから、ぜひ学生さんに学校現場で学んでほしいこと、例えばアシスタントに入っている以外の時間には「他の授業を見に行ってください」とか、「自分の専門の教科だけでなく、障害児学級の子どもにも1度出会ってください」と言っています。なかなか現場に行きますと障害児学級担当というのは数多くありません。けれども、これから特別支援教育が始まると、

学級に特別支援の必要な子たちがいるわけです。ですから、そういう子たちにも出会ってくださいますということで、障害児学級のほうにも入っていただいたりしております。といったことで、本当に私どもも大学生からいろんな面で刺激もされ、学校としてとてもいい効果を上げているな、と思っております。本当にいろいろとありがとうございます。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【司会 - 中島】 ありがとうございます。それでは、陪席者であります事務方の紹介を事務長からお願いします。

【岡野事務長】 失礼いたします。それでは、陪席者の紹介をさせていただきます。

事務長補佐の堀でございます。学部を担当しております。

同じく事務長補佐の村田でございます。附属学校の事務を担当いたしております。

総務係長の紀平でございます。

学部係長の山下でございます。

総務係主任の土性でございます。

私、事務長の岡野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【司会 - 中島】 申し遅れておりました。実は冒頭でお願いをしておかなければいけないことでしたが、録音にて報告書を取りまとめることになっております。申し訳ございませんがご発言のときはマイクをお使いいただき、こちらでお名前を確認の後、ご発言ということでもよろしくお願いいたします。

それでは、まず外部の委員の先生方の中で、取りまとめをしていただく代表の先生を決めさせていただきたいと思うのですけれども、山口先生ということでもよろしいでしょうか。では、山口先生よろしくお願いいたします。

それではまず、本配布の資料の確認をさせていただきたいと思っております。クリップ止めになっておりますものがございますが、第6回三重大学教育学部外部評価委員会次第。それからその次、座席表でございます。それから外部委員の先生から承りました質問用の返信用紙でございます。これがお二人の先生方からの質問用紙、2枚でございます。

そして、まず今日の委員会次第を見ながら日程のご案内をさせていただきたいと思っております。まず、こちら側から概要の説明を30分ほどさせていただきます。そしてその後、座談会という形で外部委員の先生方から、いろんな意見、質問等、ご忌たんのないところ、いろいろ伺いたいということでございまして、それが15時10分まで座談会ということでございます。その後若干休憩を取っていただきまして、予定では15時20分から15時50分までの間、大学の委員、それから陪席者は退出させていただきまして、外部委員の先生方で評価の取りまとめをこの場で行っていただきます。そして30分ほどで講評取りまとめをしていただいて、その後15時50分に私どもはまたこちらに戻ってまいりますので、学外委員の先生から講評を私どもが承るというふうな予定で進行させていただきたいと思っております。

それではまず、こちらの大学側からの概要説明をさせていただきたいと思います。まず三重大学概要、それから三重大学教育学部概要について、学部長のほうからお願いいたします。

【丹保学部長】 それでは座ったままで失礼いたします。時間の関係もありますので、ごくごく簡単にご説明したいと思います。

まず、大学概要というこの赤いものがございますので、これをご覧いただきながら説明をしたいと思います。

三重大学はご存じのように、5つの学部から成っておりますが、学生数のことをちょっと簡単に紹介しますと、14ページが一番分かりやすいんじゃないかと思っておりますので、14ページをご覧いただきますと各学部の学生数、それから大学院の学生数等が書いてございます。それで、右側のほうに計というのがありまして、そこに現在の学生、学部学生の合計が6229名というふうに書いてありますし、大学院生は1204名、その他ございますが大体7500名ぐらいということですね。そういうふうになるんじゃないかと思っております。それで、あとは大学にはもちろん職員がいますので、職員の数をちょっと申し上げますと、これは7ページにございます職員の数が、各学部の数等は省略いたしますが、合計で1686名ですね。こういう数になっております。その他、若干ございますけども、大体こういうのが三重大学の規模だというふうにお考えになっていただければと思います。

三重大学の歴史については、この大学案内の最初のほうに、組織図のところに書いてございますので、これは後でご覧いただければと思います。

それから、あと大学の学部のほうへちょっと参りますと、これは今年、少し変わりますのでそのことを中心にお話をしたいと思います。大学案内の中の8ページに教育学部の大学院、それから学部の課程についてはここに書いてあります。今回、いろいろと改革がございましたけれども、この数等については変わらないのですけども、内容が変わりましたので、内容について申し上げたいと思います。

内容については、別の紙がございまして、こういう三重大学教育学部の改組という色刷りになったものがございます。これが来年度以降の新しいものを示してあります。よろしいでしょうか。こういう2枚になった、2枚組のものでございますが、よろしいでしょうか。ここに現行と、それから18年度改組というのがございまして、特に教員養成課程の100名が145名になるということですね。これが大きな変更です。それから情報教育課程の60名が20名になるということですね。それからもう1つは日本語教育コースという新しいコースができるという。後の内容は人数の変更でございますが、これはまずお辞めになる先生方が多いので、今後補充をしなければいけないという、そういう事情がございます。それから、日本語教育の需要が高いということで、国際協力を、国際交流を進めるためにも日本語教育が必要だということで、こういうふうなふうになったわけです。もしご質問があれば、後で詳しくご回答いたしたいと思っております。こういうふうに今、学部として

は組織を変えて改革を進めているところでございます。

それでは、大学の全体的な教育内容も含めて簡単に、後で詳しくは本田委員長がお話しいたしますけども、大きな動きということについてお話をしたいと思います。

大学の中期目標・中期計画というのがございます。いろいろと、いろんなものを開いていただいて、申し訳ございませんが、「中期目標・中期計画及び具体的な達成目標並びに平成 17 年度年度計画」というのがございまして、これにいろいろ細かいことが書いてあるんですけども、大きく 1 ページ目。このかなりの分厚い資料がございまして、この 1 番、1 ページ目の 1 のところですね。整理番号というのが左にございますが、その 1 の一番最初のところに教育全体の目標というのがございます。「感じる力」「考える力」「生きる力」がみなぎり、地域に根ざし国際的にも活躍できる人材を育成するというのがございます。こういうことで、大きな目標を立てて全学がその中でやっているということになります。それで、平成 17 年度に教育学部としても大きなビジョンというものを作りまして、1 枚ものの色刷りのものがございまして、そこに「教育学部ビジョン」というものを作っております。それで、中期目標・中期計画における学部教育目標ということで、これは全学のものを受けて、教育学部のほうにこういう形で目標を設定したものです。その中に特に、実践的能力を養成する、付けるということですね。それが教育学部の一番大きな人材育成の目標になっています。これに向けて今、いろんなことを考えているということでございます。国際交流とか、地域とともにというものも、すべて実践的な力を付けるという、そういう目標に向かって今、進んでいるということになります。

その裏のページには、もう少し具体的に書いてございます。これまでは非教員養成課程に対する意味付けが少しあいまいでしたけども、やはりあくまでも教育というものに焦点を置いて、非教員養成課程も考えていくということをして。それから、現行の大学院を見直したり、教職大学院、専門職大学院というものは、教職大学院というふうに言っていますから、そういうものを考えていくとか。それから、学部のカリキュラムを考えるために委員会を作るとか、そういうようなことを考えて進んでいる最中です。

その下にいろいろ書いてございますが、これについては後でもう少し詳しく申し上げたいと思います。

そういうことで大きく言いますと、こういう方向に向かって今、進んでいるということになります。具体的に最近の動きを簡単に申し上げますと、先ほども外部委員の方からのお話でしたが、学生ボランティア活動ですね、こういうものを始めております。それからユースパートナーですね。これも先ほどお話にございましたが、こういうものも始めて。それから、美化運動というふうに申しまして、学生も教員も事務職員も、みんなで学部内をきれいにしようということで、2 年前から始めまして、もう 4 回になります。そういう運動を展開しております。この中でもやはり実践的な、さまざまな力が付くんじやないかということを考えております。それから F D 委員会ですね。ファカルティ・デベ

ロップメントとよく言いますが、FD委員会を作りまして、そこで学生とともに語り合ったり、さまざまな催しを行ったりして、学生とともに考えるということをやっております。それから最近、先月、先々月にかけてございますけども、学部カリキュラム改革委員会とか、それから教職大学院の設置準備委員会というような、こういうふうな委員会を設けて今、学部カリキュラムの改革に向けて、また教職大学院の設置に向けて、準備を進めている最中です。

それから、教育方法といたしましては、PBLチュートリアル教育というプログラム、PBLですね。という、そういうPBLチュートリアル教育というものを採用しまして、Problem/Project Based Learningとか、こういうようなものの方法を取り入れて、教育をやろうということを考えております。このPBLについてはまた後でいろいろお話が出るとお思いますので詳しくは説明いたしません。

それと、実地研究という、いわゆる現場に赴いて、そしていろんな学びをするという実地研究というものを取り入れると。しかもまだ1年生からそういうのを取り入れるということで、これはあと具体的にどういうふうにするかというだけの問題で、もう取り入れるということは決まっております。こういう動きを今、しているところです。

それから、地域との連携については県の教育委員会と密接な連携を取っておりますし、それから昨年度は津市の教育委員会とも協定を結んでおります。現在、四日市市の教育委員会とも連携を進めるために、上垣先生を始めとしていろんな方に協力していただいて、進めている最中でございます。それから地域の学校とも、もっと連携を進めたいということで、それも今、津市の教育委員会ともご相談しながら進めているというところでございます。

それから、国際的なセンスを持った学生を育成しなくてはいけませんので、国際交流も盛んに進めております。実は昨日、伊藤彰男先生と東先生は4日間中国に行っていて、昨日お戻りになったばかりです。天津師範大学と連携を非常に深く進めておりますし、天津師範大学は四日市の、四日市市と天津市が連携をしているという、そういうこともあって天津師範大学とも進めておりますし。それから河南省の、河南師範大学とも連携を進めております。これは先月、私と国際交流担当の学部長補佐が行ってまいりまして、協定を結んでまいりました。このように国際的な活動もかなり今、進んでいるというところでございます。

それから附属学校のことですけども、附属学校の位置付け、それから三重県における教育界における位置付け、それから附属学校がどうあるべきかというようなことも今、いろいろと具体的に進めておるところです。これについて、またご質問等ございましたらお答えしたいと思います。少し時間的に遅れ気味ですので、簡単に全体像について、最近行われていることについてのみ、お話をしておきたいというふうに思います。では、以上でございます。

【司会 - 中島】 はい。それでは引き続きまして、教育活動等につきまして、自己点検・評価特別委員会委員長 本田委員長のほうから概要説明させていただきます。

【本田委員長】 座って失礼いたします。パワーポイントで説明いたしますのでちょっとお待ちください。

教育学部の教育活動全体についてお話しいたします。先ほどもお話がございましたけれども、教育学部の学校教育教員養成課程の学生定員でございます。左が現在で右が来年度の人数でございます。次、お願いいたします。

これは三重大大学の外国人留学生の人数で教育学部がもっとも多くなっています。留学生の姿はそれほど目立たないかも知れませんが、現在 79 名の留学生が教育学部で学んでいます。次、お願いいたします。

三重大大学の授業科目でございますが、これは共通教育で、従来は一般教育と呼んでいたものです。画面の下のほうに専門教育科目とありますが、三重大大学としては共通教育と合わせて学部の授業を取るようになる形になっております。次、お願いいたします。

これも共通教育の履修案内からの引用ですが、右のほうに教育内容がありまして、共通教育と専門教育科目とあわせて、124 から 130 単位が卒業要件であります。次、お願いいたします。

共通教育はいくつかの科目に分かれておりまして、例えば統合教育科目が 8 単位、それから外国語は 8 単位、保健体育科目は 10 から 22 単位、基礎教育科目は 2 から 14 単位で、合計 40 単位が共通教育で必要な単位でございます。次、お願いいたします。

それで、共通教育の授業科目を必修にしている専攻、コースがいくつかございますけれども、上のほうの統合教育科目では、例えば音楽教育コースでは音楽文化論をはじめとして比較文化まで、美術教育コースは芸術学美術論、これらの科目が必修となっております。それから下のほうの理系教育科目といたしましては、数学と技術と理科、あるいは情報教育課程が関係しておりますが、基礎線形代数学 I、 II、基礎微分積分学 I、 II、基礎物理学 I、基礎化学 I、基礎生物学 I、基礎地学 が共通教育で開講されていて必修となっております。次、お願いいたします。

共通教育と専門教育をどのように関係付けて教育をするかは難しい課題ですが、教育学部の 1 年次の必修として、オリエンテーション科目が各コースごとに開講されております。次、お願いします。

これは今さら申し上げるまでもないことと思いますが、教員免許取得に必要な内容と単位数です。例えば小学校教員、中学校教員、高校教員とございますが、教科に関する科目、教職に関する科目、教科又は教職に関する科目、こういうふうにして合わせて 59 単位が教員になるためには必修として課されているわけです。次、お願いいたします。

このピンク色の分厚い教育学部のシラバスがございまして、教育学部の授業の科目というのは、ほかの学部比べて、多様性に富むことが大きな特徴で、1 .教科に関する科目、

2．学校教育に関する専門科目、3．特殊教育に関する専門科目、4．幼児教育に関する専門科目、5．教職に関する専門科目、6．教科又は教職に関する科目、7．生活科に関する科目まであります。ここでは、全体を教育学部科目群というふうに、仮の名前をつけていますが、こういった多様な授業科目が開講されているというのが、教育学部のほかの学部と比べた大きな特徴かと思えます。次、お願いいたします。

それから、教育実習は当然、必修ですが、ここでA類、B類、C類、D類というように記号で示してありますのは、例えばAI類というのは小学校教員免許を取る者、A類が中学校教員免許、A類が障害児教育コースで、A類は幼児教育コースです。それからB類は情報教育課程、C類が生涯教育課程、D類が人間発達課程の略称です。主免許取得を目的として4週間実習を行うために必要な科目と単位数を、教育実習履修資格として、ここでは示してあります。次、お願いいたします。

それから2週間実習になりますと、これは副免許あるいは基礎免許を取得するための教育実習ですが、同様にそのために必要な履修科目と単位数が決まっています。次、お願いいたします。

そして卒業研究、これは4単位必修で、例として国語教育コースの卒業研究の題目を示しています。研究室によっては3年生位から行うところもありますが、基本的に4年生で卒業研究も行っております。次、お願いいたします。

これは各講座の代表に対し、教育課程と授業内容の関連性についてのアンケートを取った結果です。5段階評価で各項目の下のほうに数字で4.12とか書いてありますが、5というのは「そうである」、それから1は「そうではない」、3は「どちらでもない」というふうにして自己評価したその平均の値です。次、お願いいたします。

これも同様で、お手元の「三重大学教育学部における課題と展望」から引用したものでございます。次、お願いいたします。

また学生が教育上のことだけでなく、個人的な悩みとか、そういった相談を受けるための時間、オフィスアワーを全員の教員が本年度から設けておりまして、教育学部の講義概要の一番最後のほうに示してあります。次、お願いいたします。

それで間接的な教育活動になるかと思いますが、画面に示したような各種委員会が設置されています。例えば教育実習実施委員会、「教育実習のあり方」研究会、実地研究実施委員会、介護等体験実施委員会、学生教育活動支援委員会、FD（ファカルティ・デベロップメント）委員会まで、さまざまな形で学生の教育を応援する。こういった多くの委員会がございます。次、お願いいたします。

例えば就職委員会では、非常勤講師の方々をお願いして前期（火曜日）では体育実技、総合実技演習で体育実技の、後期（金曜日）では総合教育演習で面接の対応や論作文のポイントの指導をして頂き、これらを総合科目の中に位置付けて就職委員会が世話をして学生の就職支援のための授業を開講しております。次、お願いいたします。

また教育学部同窓会の応援も得て、このような教員採用セミナーも年間を通じて学生の就職の支援のために、講演会、教員採用試験の傾向と対策、集団面接、体育実技など、さまざまな活動を行っているところでございます。次、お願いいたします。

それから、最近では「学部カリキュラム改革・PBL教育推進特別委員会」におきまして、学部カリキュラムの抜本的な見直し、「天津師範大学日本語教育コース支援合作委員会」では中国の大学と共同して日本語教育を行おうということを進めております。次、お願いいたします。

またファカルティ・デベロップメントでございますが、これは「学生と語る会」ということで、昨年11月から月に1度の割合で開催していて、学生と一緒に授業を良くするためにどうしたら良いかということについて、活動しております。次、お願いいたします。

これはその活動の案内のポスターでございますが、定期的にも活動報告のパンフレットを発行しております。次、お願いいたします。

それで、これは1つの研究成果でございますが「本学部生の課題に基づいた「学生参加型」のFDの具体的な方策の立案・実施と検証過程の研究」(研究代表者 山本俊彦教授)のような研究報告書も出しております。次、お願いいたします。

それで先ほどもお話があったかと思いますが、三重大学教育学部学生・教育活動支援委員会では教育ボランティア活動支援、学生のバックアップでございますけれども、こんな活動も行っています。次、お願いいたします。

またユースパートナーとして、29名の学生が様々な企画に参加し、学外で社会的な活動を行い、それを支援するための委員会も設置されています。次、お願いいたします。

これは先ほどお話がありました、教育実地研究が来年度から必修になります。例えば理科教育コースでは「フレンドシップ事業」として、「子ども科学教室」を毎年行って来ていますが、これを実際に教育実地研究の単位として必修化されて行く、そんなことを予定しております。次、お願いいたします。

その授業の具体案で、「子ども科学教室」の企画・準備・実施・改善を授業のテーマとして、ガイダンスに始まり実際の反省で終わる内容となっています。学生は実践的な力が身に付き、大いに役に立つと思っております。次、お願いいたします。

本日は大学に現在求められている5つの力(就職力、経営革新力、研究力、教育力、財務力)の内、教育学部の教育力についてお話し申し上げました。時間の関係もあり、大変急いでお話したことをお詫び申し上げます。以上でございます。

【司会 - 中島】 大学のほうから簡単な概要説明をさせていただきました。それでは、学外委員の皆さま方から、ご意見ご質問等。はい、では既に受け取っている質問のほうへお願いします。

【丹保学部長】 配布資料に外部委員の方からのFAXによる質問事項が入っていると思うんですね。

水越先生のほうから、三重大学の「感じる力」「考える力」「生きる力」を定期的に評価する方法を作成し検証するというのですが、これについてはまさしく今、これ、先ほどお配りいたしましたけども、三重大学全体として三重大学生の4つの力に関する調査というものをアンケート調査してしまして、どれくらい定着しているかというようなことを今、調査している最中でございます。そういう意味では大学のほうも、こういう力が本当に付いているかどうかというのを確認しなきゃいけない、ということは自覚しておるところです。また本当は、それはすごく難しいんです。評価すること自体が難しいんですけども、大学としてはやっぱりやろうとして今、やっているところです。

それからコミュニケーション能力の向上というのがありますけども、これについても大体教育学部は演習形式が多くて、かなりこういう能力は付いていると思うのですが、それでもやはり卒業をした学生、教員になる人たちの様子を見ますとやはりコミュニケーション能力が足りないということがよく言われております。先ほどPBL教育ということをお願いしましたけども、PBL教育は学生が問題を設定して、学生がみんなで考えて、そして作り上げていくという教育ですので、そういう中で学生同士が話し合いをしたり、発表をし合ったりというようなことが必ず中に入ってきます。そういうことではPBL教育を取り入れることによって、コミュニケーション能力も付くんじゃないかというふうに考えております。それから、実地研究ということで現場に出掛けて行きますので、現場に出掛けて行って黙っているわけにはいけないので、やはり会話とかコミュニケーション能力を付けざるを得ないような状況に、学生たちをそういう環境に置いて、コミュニケーション能力がつくように考えていきたいというふうに思っております。

それから、コミュニケーションという授業そのものがひょっとすると必要かもしれないということは今、考えておる最中でございます。これが水越先生に対するお答えですね。データのものはちょっとまだ揃ってませんので、データのものはお示しすることはできませんが、そういうことで今、大学としても考えているということです。

それから、その次のところに川北先生のものがございますが、達成目標については今、どれくらい達成しているのかということを出し合って、1つ1つを何パーセント、何パーセントというような形を出し合っているところです。それが最終的にどういうふうになるかということはまだ今、現在進行中、昨年度のものを進行中でやっているところでございます。

それから、もう1つはホームページに掲載したらどうかというのがあるんですけども、これ今、ご存じのように個人情報保護法とかでいるんなやこしいことがあって、それで中期目標・中期計画についてはもう出ています。出ているのですが、そういうものを省いた形で掲載するかしないかということをやっと今、考えていきたいというふうに思っております。

それから、2番目の「心の病」の問題で、研修の問題とかこういうことが考えられてお

りますけども、大学のほうでも「学生支援のための相談室」とか、「よろず相談室」とか、それからカウンセラー等が新しく設置され、配置されまして、学生に対するケアもかなり考えているところです。それからちなみに、県下の先生方もうちの教育実践総合センターのほうにかなりの方がご相談に来ているという話も伺っております。

以上、非常に簡単ですけども、お答えにしたいと思います。後でまたございましたらよろしく願いいたします。

【司会 - 中島】 それでは、今の学部長の回答はよろしいでしょうか。それでは、先ほどの概要説明および午前中、精力的に公開授業をご覧いただいたりしましたし、事前にお送りしていますいろんな資料等をご覧になって、ご質問ご意見等、お願いしたいと思いますが。

【丹保学部長】 先ほど、テープを回して、そしてテープを回してとるということを言っていましたけど、必ず皆さま方のほうにお渡し、皆さま方のほうにテープをとって、粗いものを必ず回しますので、こういう表現をした覚えはないとか、こういう表現はちょっとあのときに言い過ぎたからちょっともう少し柔らかい表現でとか、(笑)そういうのがあれば後で修正できますので、この場ではあまりご遠慮されないでその辺のところはよく私も承知しておりますので、よろしく願いしたいというふうに思います。

【司会 - 中島】 いかがでしょうか。山口先生、お願いいたします。

【山口(典)委員】 じゃあ、ちょっとお話をさせていただきます。先ほどの続きみたいな形にもなるんですけども、教員の質の向上というのは非常に大きな課題でして、学力低下の問題等も兼ね合わせながら、現在、保護者の方々にとっても大きな問題、課題となっているのではないかというふうな気がするんです。

それで、団塊の世代が退職する中で、これからもう1つ、昨日のどこかの新聞にもあったと思うんですけども、岐阜の聖徳学園大学が全国で公私立でも比べてみて、教員への採用率が飛躍的に伸びてきたというふうなことがいわれています。ただ、就職率は講師の割合が非常にまだ多かったみたいですけども。そういうふうな中で、大阪のほうでは2000人ぐらいの小学校教員の採用をされていると。今年、ほかの大学にも行かせてもらったときに聞かせていただいたんですけども、三重県は不合格だったけれども、大阪や奈良が通ったと。三重県の出身者ですが、向こうへ行くかどうかを悩んでいるというふうなことをその大学の方に聞かせていただいたんです。

それで、これから大量採用という形になります。今年、三重県のほうでも小学校で170人くらい採ってきましたので、来年からも同じぐらいの小学校ですと採る形になると思います。中学校も徐々に増えてきておりまして、特に採用の多いのが数学とか理科とか英語のほうだと思うんですけども、その点からちゃんと三重大も改組をして、定員がプラスになるように考えていただいているようです。良いところを突いてきていただいているな、というふうなことを感じております。

それで、ただ質の向上という問題で、先日初任者研修の実施協議会というのがありまして、先生方、初任者の先生方に何が今足りないのかというふうな話し合いになったんです。そのときに、私どもの昨年度からの課題でしたが、県議会の話の中でもある議員さんから出てきたのですが、研修というのがあるけれども、研究と修養ではないかと。先生方は研究はするけれども、修養が足りないのではないかとというふうな議会の指摘がありました。それで、修養をどうしていくかという課題の中で、人間性を培っていくような先生方の質の向上も図っていかねばならないのではないかとというふうな話になったんです。それがうちの研修分野での、最近の大きな課題になっているんですけども。

今年度の大学の計画の中を見させていただくと、「感じる力」「考える力」「生きる力」、そしてその基盤となるコミュニケーション力の向上を図るというふうなことが、中期目標の中の2に掲げられておりますけれども、初任者研修の実施協議会のときに、もっと初任者に人間性、課題解決能力、なにかにぶち当たったときにそれを克服する力がないと。それからコミュニケーション力という中で、子どもとの付き合い方というものが、非常に淡泊になってきているというふうなところも話し合われました。そういった点で今、三重大さんのほうが望んでみえるこの3つの大きなビジョンの中の目標、そしてコミュニケーション力の向上を図るところは大きな方向性としては良いというふうに思います。

ただ、それを具体的に知的なものだけではなく、前から言われておりますように子どもと同じように、「知」、「徳」、「体」とかいうふうな、先生も体力が要りますし、知的なものだけではなくに心というものも必要ではないか、というふうなところがあります。そういった面も今後、また考えていかねばならないし、受身的なものではなくに今日の森脇先生の授業ありましたね。ああいうふうな、やっぱり参加型で子どもの、逆に言ったら学生さんの気持ちをくすぐりながら、好奇心をかき立てながら、教育に対する、子どもに対する思いというのを積極的にかもし出していくような授業の、参加型の授業というものも必要ではないかな、というふうに考えさせていただいたところです。今日は森脇先生の授業を自分自身ももうちょっと話聞きたいなと思いながら見せていただいていたんです。ああいうふうな気持ち、授業を受ける者の気持ちの中へ入っていける授業、それがやっぱり学校でも先生方の質を問われる内容ではないかというふうな気がします。

それから、このごろもう1つ多いのが、先生方の懲戒処分が多いんですね。それは服務という点での教員としての自覚というのが足りないということです。教員に成り立ての、始めのころはいいと思うんですけども、いろんなところから棒が折れていく、挫折して棒を折ってしまって違う道に走ってしまうという先生がみえます。そういった点でやっぱり、精神的にも強い学生さんたちを育てていかねばならないのかなという点で、先ほどありました子どもとの付き合いの体験ですね。こういったものがやっぱり大きな重要なポイントになっていくのかなというふうな点で、支持させていただきたいなというふうな気がします。

それから、もう1つだけ話をさせていただきたいのですが、学力的にいろいろな調査の中で、やっぱり数学、理科のほうの先生方の授業の工夫が足りない、というふうな話が出てきております。その中で、子どもたちに理数離れがしているのは先生の責任じゃないかという話の中で、英語のほうで文科省の施策で、素晴らしい先生方の英語会話を身に付けるといって、英語教育の特別のカリキュラムの研修を実施し、三重県下全員の英語の先生を対象にしているというふうなところがあります。そのような研修を県のほうとしては、理科の実験をできる先生、それから数学の面白い興味を引いて、学力低下をなくする工夫をする研修をやっております。そういった点でフレンドシップですか、今、出てきましたけど子ども科学教室。ああいうふうに、学生さんたちにしっかり理科の実験をする面白さを自分たちが感じとったらいいなあとと思います。このごろテレビのほうで面白実験のほうを米村さんでしたか、されているのがよくありまして、みんなが関心を引くと思うんです。ああいうふうな驚きを子どもたちに与える、感動を与える授業というのは非常に大事なので、そのところをやっぱり小学校課程の中でもしっかりやっていただきたいと思えます。どうしても理科の実験を逃げてしまう先生が多いです。

それから、もう1つ。先ほどのカリキュラムの中にありましたけれども、これから英語のほうの力が大事になってきます。昨日も実は、名張の小学校行ったんですけども、そのときに英語のできる先生が1人、子どもたちに指導していました。それから英語のできるボランティアの人を呼んで、非常に楽しい授業をしていました。これは特別非常勤で来てもらっていて、ダンスをしながら英語を学んでいくという、体を動かしながら学ぶという形式だったんです。そういった英語力を、これからは小学校の英語ということで話題になっておりますので、そういったところも入れてもらっているようです。また、力を入れながらシラバス等を作っていただくといいかな、というふうなことです。

【司会 - 中島】 何か今のご意見について、学部長。よろしいですか。

【丹保学部長】 後で、いろいろな方のご意見を伺って、多分同じようなお話が入っているかと思えますので。

【司会 - 中島】 はい。じゃあ、そのほかに何か、ご意見ございましたら。はい、川北先生、お願いします。

【川北委員】 今、山口さんが言われたことと共通するんですが、私がペーパーで出させていただいた2点目が「心の病」というところから迫っておりますので、表現は違うんですけども、今の教師というのは、非常に何かにぶち当たったときに弱いと。すぐに悩んで、休んでしまうとか、そういう現状があるわけなんです。

今、学部長さんは、悩んでみえる生徒に対しては相談とか、あるいはカウンセラーとか、そういう心のケアをやっておるといふふうなご回答でしたけれども、私は学生たちが悩んでおるからそういう心のケアをするというような意味ではなくて、やはりその学生時代にそういうたくましく生き抜いていく力、生き抜く力を超えた生き抜いていく力ですね。己

に負けないような力、そういうようなものを学生時代の勉強の中で実践的に何がやられておるのかな、と。そこところが本当に、何かの手立てがされていけば非常にありがたいなど。こういうふうな意味で2点目のこの質問をさせていただきました。多少関連はするかと思いましたが、発言をさせていただきました。お願いします。

【司会 - 中島】 この点については、「心の病」の教育の問題は。

【丹保学部長】 今の問題については、精神的に強い学生をつくるということですけど、これは実は非常に難しいんです。そこで、恐らく個々の先生方はいろんな方法でおやりになっていると思うんです。確かにおっしゃるように、非常に素直で真面目でいいお子さんなんですけども弱い人が多いんですね。

今、われわれが例えばやっているようなことを少しお話をしますと、学生と一緒に合宿に行き、そこで話にも参加できないような学生がいるんですよ。そういう学生に少し和やかな中で人と話ができるような、せめて話ができるような。合宿なんかに行けばずっと黙っているというわけにもいきませんので、そういう場を設けたりとか、一緒に遊びに行ったりとか、そういうふうなことをやったり。それから指導する場合でも発表の前に何回も来るように言って、その都度その都度いわゆる研究の中で自信をつけるという。

われわれにできることというのは少ないんですけども、せめて私はその学生が私は一応の研究をしたんだとか、こういういい卒論を書いたんだとか、そういう自信をつけてやれば、多少は強くなるんじゃないかというようなことで、今やっているところです。ただ、これはほかの先生方にもお伺いしたいところですし、それから教育委員会とか現場の先生方にもぜひ、大学でこういう方法を取り上げたらいいんじゃないかというのは、むしろ私のほうがお伺いしたいところが多いんですね。1人1人は頑張っているつもりですけども、今のところはそういうようなことで、対処して。卒論なんかでもかなり厳しくやっておりますので、現場に行き「今のほうが楽だよ」というぐらい言う学生がいたりするぐらいなんですけど。それはやっぱりそれだけで果たしていいのかどうか、悩みながらやっているところでして、先生方、もしご意見等ございましたらお願いしたいですし、ぜひ外部委員の方からもこういうふうにやったらどうかとか、そういうふうなお話があればお伺いしたいというふうに思っています。

【水越委員】 高校は40人1クラスで、うちの学校は学年10クラスずつですから各学年400人です。各クラスに1人くらいはそういったケアをしなければならぬ生徒が出てきております。その重軽はありますけれどもね。確かに、精神科医にかからなければならない人もいるわけですけども、そういうふうな生徒とのかかわり方が担任教師を中心として、養護の先生、あるいは教育相談と、いろいろとかかわっているわけです。総じて担任の先生方が扱いにくくなってきつつあるのかな、という部分があるような感じがします。

一般的な話としてお聞き願いたいと思うのですが、いわば私どものほうは三重大学さんに送る立場でもあるわけで、その子たちを見ていますと、今学部長さんが言われたように、

雰囲気としては大変真面目でおとなしくて、いい子どもの層なんですね。

その層は、ちょっと言われたら弱い部分を内在している子どもたちが多いのではないのかなという感じはするんですね。川北さんの話からもありましたのですが、全くそのとおりかなというふうに感じますね。それは、コミュニケーション能力ですね。要するにいろんなコミュニケーション能力がありますが、まずは英語力ですね。また、人と接することの苦手な子どもをつくらない。要するに積極的に接する。ボランティアでやっていること、これはいいなと思います。大学生が小学校へ行ったりすることもいいことで、子どもの気持ちもよく分かっていくということなんですね。

やっぱり、学生さんに分かってもらうためには、自分はいいい子で来てあまり壁にぶち当たってないんですね。じゃあ先生になって、対応する生徒たちはいろんな生徒がいるわけで、その壁にぶち当たった子、何かでつまずいた子の対応をしなきゃなりません。その対応が今まで自分でも経験がないわけですから、なかなかうまくそれが対応しきれないということになりますね。このことが、コミュニケーションがしにくくなる。だから、今言われたいろんな体験をすることだと思いますね。体験していくことが、今後の教員としての素養をつくっていく1つの原動力になるのかと考えております。そういう点では、三重大学はいろんなことをやっていただいておりますということはいいいことだと思っています。いずれにしても今、弱い子どもたちが多くなりつつあるのかなという危ぐをしています。

【司会 - 中島】 ありがとうございます。

【水越委員】 それからもう1つ質問します。

【司会 - 中島】 はい、先生どうぞ。

【水越委員】 講義の概要、シラバスですね。このシラバス、学生にこれを渡してあるわけですね。学生が授業を受けるときに、このシラバスを見てきたかどうかとか、そういったチェックをしているかどうか、それをお聞きしたいなと思います。

【司会 - 中島】 FD委員会でそういう調査をされているのでしょうか。

【丹保学部長】 FD委員会が何かでやったことがあります。

【水越委員】 個々の先生ではされてるかも分かりませんね。

【丹保学部長】 いつだったかっていうのは、正確には覚えていませんけども、そういう調査をしたことはございます。その結果、意外と読んでいるというようなことだったと思うんですね。ただ、その内容と同じことをやっているかどうかとか、そういうのがあって、中には「内容と同じことをやるのが本当にいい授業か」とか、そういう議論があったりして、難しい問題があるんですけど。シラバスはかなり、学生が読んでいるようです。

【司会 - 中島】 よろしいでしょうか。じゃあ、そのほかに何か。田中先生お願いします。

【田中委員】 先ほどの水越先生の話にさらに関連するわけなんですけれど。大変恥ずかしいことながら、先ほどちょっと出ていましたように、私 11月2日に教採セミナーで100分ほど話をさせていただいたんです。そのときに話を聞いていただいた学生さんの学年を

見ていたら、大体3年生が多くて、あとは4年生。1年生、2年生の人も少しはいましたけど、割合に高学年のほうであったということで、話の中身が少し違ったかなと思ったんです。

と言いますのは、私が話をさせていただくということで、依頼があってから3、4人の人たちに、今度教員を目指す学生に何を期待するか、あるいは学生のうちにどんなことを考えていったらいいかということをお話すんですけど、何を話したらいいかとたずねたのです。すると、みんな異口同音に、今水越先生が言われたような「いろんな体験を学生のうちにやる」、それは特別に何ということではなしに、自然体験もあり、社会体験もあり、さらにはそういう中での「人と人とのつながり」、「集団で何かをやる体験が大切だ」と、そんなことをみんな言うわけなんですね。いかにその人たちが接する教員、あるいは学生がそういう体験をあまりしていないということを嘆いているんじゃないかな、ということを思いながら、彼らがいろいろと言ってくれたことを私は代弁する形で話をさせていただいたんです。

それで、そういったことをなんとか大学の1年生、2年生あたりで、オリエンテーションの時でもいいし、その後の教育内容の中でもいいと思いますが、学生さんに伝えていただきたいな、もし必要あれば私どももそういう所に出て、そんな話もしてみたいなということを感じました。

やはり、これまでの教育のしからしむところがそうってきているので、今はご存じのように総合的な学習で、小学校、中学校、高校といろんな課題に対して、解決の方法を自分で考え、一緒に取り組み、そしてまとめるという、そういう勉強をしているわけです。でも、まだ今の若い先生とか、あるいは学生さんにはそういったことはあまり経験がない、今まで総合的な学習等は体験していないわけですので、なんとかそんなことを今、やっていただきたいなと思うのです。どのようにオリエンテーションあたりでそういったことを、学生さんたちに大事なこととして伝えていっていただくかということが、大きな課題じゃないかなと、今水越先生のお話を聞きながら、私はあらためて感じさせていただきました。

【司会 - 中島】 この点、いかがでしょうか。学部長。体験学習について、上垣先生お願いします。

【上垣学部長補佐】 はい、上垣でございます。先ほどから、たくましく生きる力というのを付けてから卒業させること、あるいは精神的に強い学生をつくるというための手立てのこと。こういうものについてのお話がありました。学部全体として取り組んでいるというような内容としては、これからの課題なんですけれども、1つは教育実地研究という、そういう取り組みを来年度から、18年度4月から実施をしようという計画をしております。

この主旨は実際に子どもと触れ合う、それから先ほどのパワーポイントでもありましたけれども、科学教室なんかを開いて、子どもとの連携を強める。あるいはその実際の現場へ出掛けて行ってその学校の現場の先生、あるいはその生徒、児童等との触れ合いなどを

通して、実地体験を積み重ねると、そういうことを中心とした授業科目でございます。これは毎週、何曜日の何コマ目に当てはめて、定期的にできるようなものではないかもしれませんが。例えば、その土日を使うとか、あるいは長期休暇を利用するとか、そういうことですので、特殊な形態で行われますので、県、あるいは市町村の小中学校、高校などにぜひ、こういうことでやりたいのでご協力をお願いしたいということも申してまいりました。それで今後、いくつかそういうものが増えていくというふうに思っております。そういう中で実践力を培っていくというのが、学部全体として考えていることだと思います。

それから、個々の先生方はそれぞれいろいろな取り組みをされておられると思うんですけども、私が思いますのは、今のお話は高等学校で言うと生徒指導に関するところで、教科指導ではないわけですね。

私もずっと前、京都で公立高校の教師をしてましたから分かりますけれども、どうしても先生というのは、一種のパラドックスを持っているんですね。どういう意味かと申しますと、私の教科は数学なんですけど、数学を教えていて、なんでこんなものが分からないのかと思うんですよ。つい思ってしまうんですよ、それは。一応数学はできたから数学の教師になっているわけで、だからできない人の気持ちが分からない面があるんですね。これはどの教科でもそうですよね。しかし、教えようと思えばちゃんと理解していないと教えられない。だから教えるとき、分からない子の気持ちが分からない。しかし、それも分からないといけない。ジレンマですよ。どうしても教師はそういうジレンマ、あるいはパラドックスを内在して営んでいるわけだと思うんですよ。だから、この辺の両面を分かって、分かった上で教師になってほしいと、私なんかは思っているわけです。

私なんかは担任、今は担任はしていないんですけども、しているときは例えば期旅行ってありまして、何期何期のその期全体の学生を連れて行って、1泊2日でいろんな研修をします。そこで夜、お酒を飲んで一緒にしゃべったりとか、あるいは人生論を交わすとか、そういう期旅行がこれが1年生のときはオリエンテーション研修と言います。それから2年、3年は期旅行と言います。4年生はございませんけれども、そういう期旅行の場を活用して、学生指導を行う。あるいは4年生になりますとゼミをやりますから、少人数の指導ですので、そういうところでいろいろ人生の問題、それから突き当たったときにどうするかとかを話します。それから私が特に言っていますのは、自分1人で悩むんじゃなくて、学生、友達と一緒に相談をしてなんか解決口を探りなさいということです。ついつい自分でこもりがちな学生はいますけれども、もっといろんな友達と話をして、悩みがあるんだったらいろいろ相談するというようなことをしなさい、というようなことも含めた、そういう学生指導を私は担任のときにしているんです。

個々の先生もそういう機会を利用して、恐らく指導されている方が多いのではないかとこのように思います。個々の先生方の指導はそういうことですし、学部全体としては最初に申しましたような取り組みをこれから進めようというのが、現状ではないだろうか、

個人的な意見ではございますけれども、そういうふうに思います。以上でございます。

【司会 - 中島】 先生、よろしいでしょうか。そのほかに何か、ご意見ございましたでしょうか。はい、坪井先生お願いします。

【坪井委員】 2004年度の文部科学省の指導力不足教員の資料を見せていただいたら、566名が指導力不足と、昨年度より85名も多いというような結果で、特に学校種では小学校教員が50%ぐらいで、中学校が30%、高等学校が15%でした。何かここらあたりに1つヒントがあって、これはいろんな分析があるかもしれませんが、やはりある意味では教員というものは小学校であろうとも1つ得意な分野というか、何かこうだというのを持っていることが1つ大事じゃないかと、その辺がないところが少し小学校の弱みであるのかなと、例えばですけれども、私はこのような見方をちょっとしているんです。

それと、男女比では男性教員の70%の方が指導力不足、女性教員が30%ということで言えば、小学校教員というのは女性がかかり多い割に男性が多いというのは、男性のところでは何か教員としての資質を分析すれば問題点が出てくるんじゃないか。それから、年齢で言うと40代が50%、50代が34%と、つまり40、50代の方が指導力不足ということで、どうもこれは年数の、ベテランというのとは関係ないと。むしろ、20代が1%ということで見れば、あまり年数がたてば大丈夫だということでもない。どうも研究心とか挑戦心を失っていく要因がこの指導力不足とも関係しているんじゃないか。そんなことも考えると、どうも教員に必要なのは技術だけではなくて、本当にやる気というか、新鮮さというか、挑戦欲というか、そういったものとか、あるいは1つこれだといったものを学生に持たせることが、こういった指導力不足の分析から考えれば必要かなというふうに自分なりに今ちょっと考えつつあります。

そう言ったところで、最近は学生さんをお預かりしておるんですけども、もう就職が決まった子と、決まっていない子の2つに分かれており、思いは違います。受からなかった子にとっては、いかに来年受かるか、そのことが彼女、彼らの課題です。

それから、受かった子はどうか。何のために学校へボランティアとして来たかと聞くと、これは不安からとのこと。実際に担任を持たされたらどうなるかということ、採用は決まったけれども、どう来年の4月からしていったらいいか、ぜひここで学校の雰囲気にも馴染ませてくださいといったこととか。それからどんなふうに「学校だより」を書いたら良いですかとか。本当に、僕にとっては意外な質問を受けまして、細かいことに不安を感じていて、保護者とどんな話をしていたらいいとか、等々といった相談がありましたので、じゃあ君たちはせっかくうちの学校の子どもたちに学力の補助をしてくれるのだから、私は逆にあなたたちが少し不安に思っていることを聞いて、相談できることがあったら答えましょうということで、座談会を開いたり、ボランティア活動が終わった後に残っていただいて、お互いの学生さん同士の情報交換をしたりと、そんなことを今、させていただいております。

こういった意味では、就職が決まった後の学生さんのフォローをする意味では、実際に4月から学校現場で働くまでの間をボランティア活動なんかをして、少し緊迫感を保ちつつ学校現場の雰囲気を掴んでおくということでは、ボランティア活動に学校へ行くのも1つの良い方法じゃないかな、というふうに感じております。

ただ、学生さんの話を聞いていて、どうも採用試験に合格しなかった子は、これからどうしたら良いかとか、面接の方法を教えてくださいとか、そういう話もあります。これは必ずしも三重大の子だけではありません。

それから、合格した子にしてみたら教育技術をどうしたら良いかとか、板書の仕方とか。でも、「私はなぜ教員になるんだ」という、もっとその辺の根本的なところをしっかりとっていないと、とにかく技術だけ付ければ良いということだけに向かないようにということで、もう少し哲学的というか、そんなものもしっかり学んでもらいたいなという感じがします。そういった意味では今、学校には先輩の先生がいっぱいお見えになりますから、声を掛けて分からないところは聞くようにと、そんなことを1つやっております。

それからもう1つは、最近、学校現場では不審者対応とか、いろんな問題があります。昨日も広島の子どもさんが下校途中に刺された事件。そういった意味では、不審者とか、災害とか、そういった危機管理もこれからは新しい課題としてあるんだよということを、私は大学で教えてもらったほうが良いのか分からないんですけども、学校現場は今、その辺が今日的課題です。それから、保護者への対応、地域の人との対応。生徒と教員のコミュニケーションも大事だけれども、保護者や地域の方々とどれだけコミュニケーションを図るか。そういった意味では教員仲間よりも、いろんな友達、企業の友達、そういったところと付き合いなさいよというようなアドバイスをすると、学生さんも気付かないことがいっぱいあるので、「あっそうなの」というようなことで、意外な発見をしてくれているようです。そういったことも私としてもさせていただいております。

それから先ほど田中教育長が申しあげましたように、学生さんの本音なのかどうか分かりませんが、大学の研究の授業も良いんですけども、やっぱり学校現場ではどんなことをやっているかということ、特に大学の3年生、4年生と近づくにつれてもっと聞きたいようです。でもその学問、ペーパー的な講義が若干多いということで不満もあるんですけども、教育実習に行くと学校の生の様子が掴めるという機会が若干あるということで、その辺りは楽しみにしているということ。私もできれば、教育委員会とか現場の先生方が大学へ赴いたりすることは大事なということ、つくづく感じました。逆に、学校現場は理論というのがちょっと苦手です、実践はするんですけども、なかなか理論付けてまとめるのが苦手ですので、その辺りは大学の先生方に学校へ来ていただいて、学校側での取り組みをうまくまとめていただくと非常に助かりますので、その辺の連携は大事なということをおもっております。

最後に、私は田中教育長の下で小中連携とか幼小連携をやってきました。ですから、大

学から見て一番近いのは高校かもしれませんが、もっと今の小学生とか中学生という子どもさんの実態を生徒指導とか学力面も含めて見ていただきたい。ゆくゆくは大学へ来てくれるお子様だと思いますので。そういったところも今、上垣先生もよく学校現場に来ていただいておりますので、市内の小中学生の実態をよく分かっていただいています。そうやって掘んでいただいて、大学教育の何かの参考にしていただければいいんじゃないかなといった感想を持っております。以上です。

【司会 - 中島】 山口先生お願いします。

【山口(悦)委員】 私が話をしたいことをほとんどもう出されてしまったのでごめいすけれども、私たちが教師になった時代というのは、教師になりたくて三重大学教育学部に来て、そして教師になっていったと。そういう時代でした。やはり、教師になりたいという強い意志と、情熱とまではいきませんが、そういったものを持って、この学校に入学してまいったと思います。

今、だんだんと偏差値が大学の共通一次が始まったころから学生たちは随分変わったというふうに大学の先生からお聞きするんです。じゃあ変わったらそのままでいいのかと。教育学部に入ってきた子、大学としてはやはり教師としての情熱を持たず、持たせるというそういう意味での教育は必要ではないのか。今、3、4年生に随分、いろんな手立てをしていただいて、教採に向けての指導等もされているようなんですけど、やはり1年生、入った段階からある程度、4年生の採用試験に向けての指導、助言等も、もっともっと子どもたち、学生たちの中に啓発をしていってもいいのではないかな、というような気がいたしました。

それと、教育実習が生きるようなカリキュラムってないのかな、と思います。私どもも、そんなふう感じておりましたし、それから今、学生のアシスタントに来ている子たちも同様のことを申すんですけども、教育実習を終えるとやっと先生になるんだという意識が芽生えてくる。そしてああ、もっと教材研究のときにもっとこんな勉強をしておけばよかったな、というようなことも感じるというようなことも申しております。ですから、例えばいろんなカリキュラムの中に、限定というとおかしいんですけど、教育実習経験者に限るとかいったような、そういった誰でも自由に取ってもいい履修科目もあるかもしれないんですけども、そういった限定したカリキュラムでもっと深めた内容のもの、というのも指定科目というのか、受けるときの指定とか、もしかしたらあるのかも分かりませんが、そういったことも1つかな、と思います。

それと、やはり今来ていただいているアシスタントの方にお伺いすると、例えば小学校の採用試験、その方は合格されたんですけども、例えば西洋史。これは何、というような教科ではないんですけど、例えば西洋史というのを取るとすると、そこで勉強したのは中国だけだったと。今から私が小学校へ行って、社会という教科も持つわけなんですけれども、中国のことだけでは西洋史をみんな知ったことにはならないということで、やはり

とても不安に思っ見えるということですね。

それから、先ほど坪井校長先生がおっしゃったように、いろんな人との付き合い方、子どもとの付き合いはまずですが、保護者や地域とのかかわり方についての不安を持っているというのは、これはやはりどの学生さんもおっしゃいます。また、学校のほうも今は、家庭や地域と連携なくしてはうまく子どもたちを育てていくことはできないという中で、教師のほうも地域に出たり、あるいは保護者とともに活動する場面が大変多くなってきているんですけれども、中にはそれを仕事というか、役割としてしか受けられない、そういう教師もいるわけなんです。そこから学ぶいろんな子どもの姿だとか、一緒に活動することで学ぶいろんな子どもの姿、あるいは地域や保護者の声を聞く、そういった大事な場であるという、ともに喜び合える仲間であるという、その感覚ですね。この感覚を持って、先生になっていただけたらなというふうに思います。やはり、子どもの小さな変容が見つけられて、そして喜べる教師でありたいと願うわけなんですけれども、それはやはり実際に触れ合わないことにはなかなか身につかないという意味で、そういったことにもぜひ、学生たちも積極的にかかわっていったらうれしいなというふうに思います。

それと、先ほどコミュニケーション能力ってということで、いろんな大学側と学生が語り合うFD委員会等も立ち上げていただいて、これはとてもいいことだな、というふうに思ったんですけれども、私どもの時代はどちらかという言葉ではうまく言えないけど、なんか心がつながっていたという感覚があったんです。やはりコミュニケーションというのは心が、いくら頭で言葉を並べても、やはり心がつながらなければ、コミュニケーションと言えないと思うんです。ですから、ぜひ1つには、指導教官、昔は指導教官と言ったんですが、との人間的な触れ合い、先ほども上垣教官のほうからもお伺いしましたが、そういった指導教官との触れ合いの中で、教師としての使命感であるとか、情熱を育ててほしいなと思いますし。

それからもう1つは先ほどから何度も出ています、アシスタントだとかユースパートナーだとか、そういったものを例えば単位制にしてしまうと、義務になって、受けなきゃいけないものとしてそこに心が入るかどうか、もうひとつ不安な部分もあるんです。でも例えば先ほど、お昼に出ていました授業時間が大変長い中で、そういうところに参加しにくいというのであれば、単位制にすることによって、授業時間内に組み入れることもできるのかなとか。それからクラブ活動、私も学生時代はクラブに学校に来ていたような感じがしないでもないんですけれども、クラブ活動の中でいろんな人と人との触れ合いを学んでいったようにも思いますので、そういったクラブ活動もしっかりとできるような、そんな時間の確保といったようなこともお願いできたらな、というふうに思います。どうもありがとうございます。

【司会 - 中島】 ありがとうございます。まだ、予定時間がございますが。上垣先生、お願いします。

【上垣学部長補佐】 先ほどから指導力の問題だとか、それからそれとかかわっての教育実習のことなどが出ておりますけど、先ほど私が申しました教育実地研究というのにももう少し補足をさせていただきたいと思うんです。

本学部ではその教育実地研究という名前と、教育実習という2つの名前がありますが、これは主旨的には同じものだと考えております。これを学年、1年次から順次継続的に学生にそういうことを履修させようと、そういう計画をしております。

1年次は教育実地研究基礎という名前で、これが最初に私が申しましたように、教職への意識を高める、先生になりたいと、そのために子どもと触れ合う機会をたくさんつくる。これが1年次の段階。これを教育実地研究基礎と申しております。2年次には例えば、

教材研究とか、何とか教育法とか、そういう教職科目の中で理論的なことを学ぶと同時に、回数は多くはないでしょうけれども附属学校、あるいは協力していただける公立校の現場を見せていただいて、それとの関連で勉強をしていくというのが2年次の教育実地研究に関する科目。それから3年次が4週間の教育実習。それから4年次に2週間の教育実習と。こういうふうに1、2、3、4年と順次、段階を追ってそういう実践的な力をつけさせようという計画をしております。

そして、4年生で一応、2週間の教育実習を終わりますと、実習としては終わるんですけども、さらにそれを深めたい、さらに発展させたいという希望を持っている学生もいるでしょうから、そのために4年生の後期に、教育実地研究という名前なんですけど、選択で履修できるようにしています。だから1年生に置かれている科目は教育実地研究基礎、4年生の後期に置かれている科目は教育実地研究。その間に、3年次と4年次に4週間、2週間の教育実習が入ると。

こういう一連の科目を設定いたしまして、そして4年間でその精神的に強い、あるいはコミュニケーション能力を付ける、それから実際の指導力を培うといったような諸々の実践的な力を付けさせていきたいな、ということでそういう計画をしたカリキュラムを構成しているということでございます。ちょっと補足の説明でございます。

【司会 - 中島】 はい、山口先生お願いします。

【山口(典)委員】 今の教育実習の件なんですけれども、いわゆるわれわれが受けてきた教育実習というのは、ある面では学校のきれいなところを見せてもらいながら、先生に指導をしていただいて、導いていただいて教員としての資質というものの基礎固めという形でのものだったような気がするんです。

先日、南のほうの非常に小さな学校、中学校だったんですけれども、行ったんです。それで、その子どもたちは十数人で1つの学校です。1学年が非常に少ないんですけども、複式にはならないぐらいのぎりぎりのところなんですけれども、その学校の子どもたちは全校集会をする中でも小さな声でしゃべるような子どもでした。それで、先生方はどうかというと、ここの子どもは素朴で非常に素晴らしい子どもたちであると言われ、実際に

こうやって1対1で非常にいい教育ができるということで、自負してみえました。ここへ来られる先生方は、非常にたくさん希望があるんですと言ってみえました。

それが、例えばその先生方がもし、そこで採用された後、津とか四日市の大きな学校へ来たときにどういうふうなショックを受けるか。それで、その先生の職場が変わっても続けられるかなということで、心配しながら帰って来たところです。やっぱり教育実習である程度きれいなところを見せてもらいながらしていると思うし、今の話のように先生方が非常に良い教育ができるということに満足する中でも、やっぱりもう1面の裏のというか、子どもたちのドロドロしたところ、そんなところもやっぱり見る必要があるのではないかと。それが素晴らしい教育に向かったの教育をやっていかなければならない中でも、もう1つ教師の使命としては、さっき先生が言われましたけれども、分かる子と分からない子と、両方に教えなければならない。理解ができる子、できない子の両方に教えなければならない。環境に恵まれた子、恵まれない子の両方にやっていかなければならない。そんなときにやっぱり、もう少しドロドロした教育のあることも学生さんたちには知らしていくべきではないのかな、というふうな気がします。逆に言うと、こんな極端な話ではないんですけども、教育困難校へ数週間行ってくるというふうなことも、1つの工夫なのかなというふうな気がします。

それから、さっきから指導力の話が出ていますが、指導力に課題がある先生方の研修をセンターでやっています。はじめ1年目、10名中1名しか現場復帰できませんでした。それで、次の年は15名中7名が復帰しました。その中で、2名の医療機関への受診命令が出まして、13名の中の7名という形で、あと途中で退職をされた方もみえますので、7名が2年目は復帰したんです。そのときにどういうふうに変わってきたかということ、どんな先生方が復帰できるようになったかと言うと、社会体験研修等で自己を見つめ直された先生方がたくさん復帰されました。

やっぱり教員になって、先ほど坪井先生からの話もあったように、途中で挫折してしまうというか、初めは素晴らしい先生だったという先生もみえます。ただ中には、教えていた生徒との関係がうまくいかず、指導に課題のある先生になっていかれたという先生もあります。

よっぽど強い信念というか、そういうふうな気構えを持っていなければ、いろんなところ、表ばかりの教員の姿のいいところばかりを見ていると、どうしてもそういうふうな挫折も来るのではないかとというふうな気がします。そういった点で、いろんなところも見させてもらいながらやっていただくということも大事なかなと思います。

それで、実地研究はそういうふうな点で裏のほうが見れるような学校の課題が見えるようになるというか、そんなふうにしてもらうと、教育実習は子どもたちを真剣に教える。逆に実地研究の中では、いろんな学校の課題が見えて、それを克服できる課題のレポートを書かせることも大切なのだと思います。そういった点での裏側の課題、学校の課題を追

求できる研修にしてもらいたいなというふうな気がしております。

【司会 - 中島】 外部委員の先生方から同様のご指摘をいただいているように感じますが。

【水越委員】 全然観点の違うことでよろしいですか。

【司会 - 中島】 はい。水越先生、お願いします。

【水越委員】 お願いでもあるんですが、歴史のことです。高等学校側にも責任はあるんですけども、「明治、大正、昭和、現在というふうな歴史はどこでやっているんだ。」と聞かれたことがありました。私は、「いや、それはやってませんよ。大学の受験で、そういうところは出ませんから、やりませんよ。」と言ったんです。

高校側でそれをきちんとしていかなければならないのかな。古代から順にやっていると途中で時間がなくて、というところでやれない。教育学部は教員になるための学部ですから、近代、現代の歴史をきちんと教える科目があるといいのかな、と思ったりもするんですね。

現在、中国、韓国等といろいろと問題をかもしているわけで、それはどういうところから来ているのか、というところを若い人たちが知らない。国際社会においては大切な部分にでもなるのかなと思います。コミュニケーション力では、言葉とかそういうことはもちろん必要なんですが、歴史的なものの背景ということもよく分かっていて話をしないと、国際理解教育をしていることにはならないと感じています。シラバスや科目を見せていただいて、そういう部分が少ないのかなと思いましたので要望します。

【司会 - 中島】 はい。では関連分野で東先生のほうから何か。

【東評議員】 どうもご指摘ありがとうございます。私、教育学部の歴史の中の外国史の1分野で東洋史を担当しております。西洋史担当の先生は今はいないんですけども、日本史の先生と2人でやっているんですね。

それで、ちょっとこれは言い訳めいた話になるんですけども、確かに近現代については非常に重要な問題です。特にアジアの中で、日本が近代において果たした役割とか、それはぜひ知っておいてもらいたいというような希望は私どもも持っているのです。なかなか専門ということがあって、これは逃げを打つということでご批判を被るかもしれないんですけども、自分が深くやっているところを中心にやっている。全く触れないというわけではもちろんありません。私の例で言いますと、日中関係史という形で朝鮮半島を含めた古代から近代までの日中関係の歴史については触れております。ですので、全くやっていないわけではないんですけども、近現代に焦点を当てて授業を構成するということはまだできていないんですね。それは問題としては感じながら、なかなか自分自身はその知識としてはあるんですけども、専門講義として構成するということはできておりません。いただいたご意見は課題として、ぜひ今後実現させていきたいというふうには思っております。

ただもう1つ、先ほどちょっと歴史のことと関係して、学生の力、能力の問題との関係

で申しますと、歴史というのは非常に広い地域的な広がりがありますし、時間的にも何千年という時間にわたります。それをすべてやる、というわけにはもちろんいかないわけでありまして、ある特定の地域なり、特定の時間的な範囲に絞って、そこを深くやる。深くやることによって、1つの歴史だったら歴史に対する考え方というものの基礎を作る。そこから学んだことをほかの地域、ほかの時間に応用する。例えば参考書を読むなり、研究書を読むなどしていかなければならないと思うんですけど、その応用力のようなものが学生にあるかないかということが問題だと思います。大学での勉強だけではなくて、教育現場に行ったときに応用力があれば、この場合はこういうふうにしたらいんじゃないかという、つまり現実対応力みたいなものがいかにしたら学生の中で培われるのであろうかといった、こういうところに問題が1つあるんじゃないかなというふうに、ご意見を伺って感じた次第です。以上です。

【司会 - 中島】 もうそろそろ時間もなんですが、まとめて学部長のほうから、よろしいですか。

【丹保学部長】 ちょっとじゃあ。先生方何かありませんか。

【早瀬学部長補佐】 一点よろしいですか。私、国際交流担当なんですけれども、先ほどコミュニケーションというお話が出ておりまして、私見を述べさせていただきます。というのは、私は英語の教師でありまして、英語を教える1つの目的は英語でのコミュニケーション能力を付けさせることです。お聞きしていただきまして、日本語の段階でそういうコミュニケーションの力が不足しているということになるとしますと、さらにそれを外国語でやるという、2つの大きな課題を背負った学生たちを教えているんだなということに、あらためて気付かされます。

それで、小さな実践で申し訳ないんですけども、そういう点から見ますと、私は8年ほど前からアメリカの学生との遠隔授業をしております。そこではコミュニケーション能力と申しますか、要するに英語でネイティブスピーカーとコミュニケーションを図るときにどのようなことに注意したらいいのかということをおぼせたいこともありまして、英語力をただつけるのではなく、そういうコミュニケーションの行動パターンと申しますか、そのようなものも勉強してもらいたいと思ってやっているわけです。そういうところでは学生はいわば当たり前のことを学びます。

日本の社会では多くの場合、話すときには今日みたいに積極的に話す場合もありますが、たいがいは待っていれば当ててくれたり、順番が回ってきたりして、それでコミュニケーションの場が与えられるわけですね。でも、別の文化の場合ではそういうことがない。それで、どういうことかということ結局、最初の授業は日本人の学生のほとんどは黙って聞いて終わる。向こうの、アメリカ人の学生の言ったことを聞いて終わるということになるわけですが、そこで先ほど言ったように非常に当たり前のことに気付く。要するに、言いたいことがあったら、自分で手を挙げてきっちりと言わないと、どんどんどんどん話が進ん

でしまうよ、ということが分かります。

もう1つは、言いたいときにさっと言わないと、後から言おうと思っていたらもう話す場を、言うチャンスを逃して言えなかったということを授業が終わってから私に伝えてきます。要するに、なぜしゃべらなかったのというと、「いや先生、言いたいことがあったんですけど言おう言おうと思ったらなんかもうチャンスがなくて言えなかったと。先ほど申しましたように、当たり前のことなんですけれども、そんなことも文化というのは自分の背中みたいで、自分からは見えないということを言われますが、コミュニケーションのあり方もそんなことがあって、そういう遠隔授業に参加した非常に少数の学生かも分かりませんけれども、そういう面でまたコミュニケーションの力を見ているのかなと思いました。

【司会 - 中島】 外部委員の先生方、最後、もうお時間ないのですが、何か一言ございましたら。よろしいでしょうか。じゃあ学部長のほうからまとめのご発言をお願いします。

【丹保学部長】 まとめというよりも、今までお伺いしていて、今われわれが目指しているところに足りないところをいろいろ教えていただけたというふうに思っているんですね。

1つはですね。やはり1年生からですね。そういう準備をしないといけない、そういうご指摘がございましたので、これをどういうふうにやっていくかをわれわれ自身何か考えないとということですね。

それから、現場ではいろいろなことが起こっていると、入ってくる学生たちはそういう経験をしない学生が多いということですね。そういうことをどうやって伝えていくかということですね。これについては現場の先生方に大学に来ていただいて、いろいろとまた直接、講義等でお話をさせていただくとか、それから逆に今度は学生が自由に提携をした学校に自由に入出入りをして、現場の先生たちと親しくいろいろと交流する中で、そういうことを知っていくとか、そういうふうな方向を今、考えているところでございますので、またご協力のほうでお願いをしたいというふうに思っております。

それから、単位の問題ですけども、これは実地研究という形になりますと単位化になりますので、ボランティアだけでは単位化はできませんので、そういうことも今、考えているわけです。来年度から。

今後、現場がそのような地域と保護者と一緒に考えていかないと、成り立っていかないとこのと同じこととして、われわれも地域とそれから教育現場ですね。それと教育委員会、行政を含めて、一緒にやっていかないと非常に難しい時代になってきていますので、その辺も今後、提携等を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいというふうに思っております。

先ほど申し上げたFD活動ですね。「学生と語り合う会」とか。それから地域の連携ですね。教育委員会との連携等もこれは、最近ようやく始まったこととございますので、この成果がどういうふうに出るかというのはもう少し後、待たないといけないのですが、多少、少しずつ出ているという話もありますので、こういう方向をさらに進めていきたいという

ふうになっております。

それから高大連携とか、それから附属学校のことが今回はあまり出ませんでしたけども、実は附属学校も以前、高校をどういうふうにつなげていったらいいかという話もございません。そういうことも含めて附属学校の在り方についても考えていかなきゃいけないと思っておりますので、よろしくお願ひしたいというふうになっております。

われわれとしては一生懸命進んでいるつもりですけども、なかなか足りないところもございますので。

それから、実は授業の単位数の問題も緩やかになりまして、専門の授業はかなり少なくても単位が取れるようになってしまったと。そうすると、多くの分野を網羅できなくなってしまったという、そういうこともございまして。非常に精選する方向に今、進んでいるわけですけど。それをどうするかということも、非常に悩ましい問題でして、そういうところも今後どうしたらいいか、ということも考えていかなきゃいけないと。驚くべきことに、例えば小学校の先生になるのに今の免許法上でいきますと書道を取らなくても小学校の先生になれるという、そういう免許法になっているんですね。私はこれでいいのかな、というふうに思うんですけど。それは恐らく、文科省はこう言うと思うんですね。それは大学でそれを必修にしたらいいんでしょうと言われるんですね。ところが、そういうすべてを任せられているというところなんですけども、それがなかなかうまくいかない場合も学生によってはありますので、その辺をどういうふうを考えていくかということも。また現場の先生方ともいろいろとカリキュラムを考える際においても、やはり現場の先生方とか教育行政の方々とも相談しながら、今後進めていかなきゃいけないというふうになっております。特に教職大学院を考える場合には、現場と教育委員会と考えていけないと作れない状況ですので、ぜひその辺のところも今後お願ひしたいというふうになっております。

お答えになったかどうかは分かりませんが、ちょっとお話を伺っていて、気付いたところを少し申し上げました。以上でございます。ありがとうございました。

【司会 - 中島】 本日はいろいろご意見いただきました。ありがとうございました。予定の時間でございますけれど、しばらくご休憩いただいた後、学外委員の先生方の講評の評価のとりまとめを山口先生を中心にお願ひしたいと思います。一応 30 分程度、ちょっと 5 分超過しているのですが、一応 3 時 50 分までとりまとめのお話をさせていただいて、3 時 50 分から私どももまた戻ってまいりまして、講評を伺うということでお願ひしたいと思います。よろしくお願ひします。今日はどうもありがとうございました。

(講 評)

【司会 - 中島】 それでは皆さんお揃いになられたようですので、学外委員の先生のほうから講評のまとめをよろしく申し上げます。山口先生申し上げます。

【山口(典)委員】 それでは僭越ですけれども、自分なりに先ほどのみなさんの話をまとめさせていただき、掻い摘んでお話しさせていただきます。三重大学さんはかつて三重県の教育を担ってみえた非常に優秀な大学でありますし、今後も三重大学が三重の教育に貢献するところは非常に大きいということで、われわれ三重の住民として三重大学に寄せている思いというのは非常に強いものがあります。そういった点で今後、三重大学に頑張っていたきたいというエールを今日は話させていただきたいというふうに思っております。先ほどの座談会の中で話の出なかったことについても、こちらのほうで話しましたので、その点も出させていただきながらお話しさせていただきます。

まず、今日の授業からですけれども、今日の授業を見せていただくと、非常にたくさんの生徒さんが入っていた授業もあります。その中でも、先ほど話もさせていただいたように、受ける授業も非常に学生さんたちが目を輝かせながらしっかり聞いて、参加もしてみえました。森脇先生の授業では資料も配られ、われわれもあの資料を読ませていただく中で、また次の授業を受けたいという気持ちさえ出てくるもので、学生さんたちも必ずそういうふうな思いからまた向学心が燃えてくるのではないかと。自分が読まれた齊藤先生の、高橋先生の本でこんなことが書いてあるよ。次、読んでみよう、というふうな感じで書かれていて、自分が教育に対する熱意をどんどん燃やしていけるのかなというふうなところもありました。それからあと、「ものづくりの授業」というのがやっぱり参加型の授業、それが少人数で行われているというところの素晴らしさがあったのではないかと思います。コンピュータグラフィックとか、ホバークラフト作り、それに果敢に挑戦してみえる学生さんたちの姿が、われわれの目には一生懸命頑張ってみえることとしてよく分かりました。

そういった点、今日は授業を見せてもらう中で、それぞれに工夫されていました。少人数、われわれ小中学校でも同じなんですけど、少人数学級の良さというのを生かしながら参加型の授業もされ、そして向上、向学心を燃やすような取り組みが行われているのかな、というふうな気がします。

2つ目としまして、いわゆる連携のことです。今まで三重大学は、人が余所から来てもらうということを待ち構えていた状態ではなかったかな、というふうな気がします。それが最近では、三重大学さんから打って出て、津市さんの学生のボランティアから始まり、学力問題のああいうふうな試験を作られたり、共同して研究をやっていこうというところがあります。それが今、四日市やさらには県のほうへも広がりを見せつつあります。それがやっぱり先ほど、一番最初に言わせていただいた三重の大きな高等教育機関であるというひとつの位置付けではないだろうかと思います。困ったときにはやっぱり三重大学というところの連携をわれわれと、われわれ教職員が困ったときにはそういうふうな三重大学

との連携を念頭に入れながら教育をさせてもらいたいなと思います。

私、数年前にニュージーランドへ行ったんです。あそこは自己評価、学校評価といわゆる外部評価が非常に激しいところで、学校が順番に点数を付けられて出てくるんですね。どこの学校が良い、どこの学校が悪いというのが公報に出てしまうんです。それで、学校はどうしたかという、学校はサポート機関に助けを求めます。どういうふうにしたら、自分の学校の弱点を克服し、向上させるか、ということなんです。それで、私が帰って、総合教育センターへ来たときにいろいろと総合教育センターでサポートができないかというふうな話もしてきました。ところがやっぱり、そういうふうな教員を養成するような機関ってところのアドバイスを得なければ、そういうふうなサポーターはできないということが分かりました。ニュージーランドのサポート機関ではないんですけども、三重大が三重県の学校の教育改善のサポーターとなれるようにしていただければな、というふうな気がしております。

それから、将来的な広がりですが、連携ということでもう1つ、附属学校の件が学部長さんから先ほどありましたけど、触れられていないということだったんですけども。実は初任者研修を毎年させていただいております。それで、初任者研修の初任者の意見の中に、やっぱり良い授業が見たいというのが多く、附属小・中学校へ行って、1つ良い授業が見れたという喜びを書いているものがたくさんありました。そういった点で、やっぱり三重の先生方の1つの授業の手本にさせていただいているのかなというふうな点で、連携も1つ、三重の教職員のためにも一役を担っていただいているというふうな気がしております。米川先生にも、お伝えいただきたいと思います。

それから3つ目としまして、FD委員会です。これは教育支援ということで、学生さんと先生方が、教授陣が連携をしながらいろいろなカリキュラムとか、今後の三重大を考えていこうという未来を見据えた良い委員会ではないかな、ということで非常に期待をさせていただいております。ただその中で、これは学生さんたちが1つ、FD委員会の中で授業評価もされているのではないかなと思うんですけども、それが全部の先生方に広がって行って、1つの体系作りをしてもらえるのが将来像かなというふうな点で、またご尽力をいただきたいという気がします。

いわゆる自己評価が始まった中で、三重県では今、経営品質なんですけれども、自己評価から評価活動をし、学校を改善していく。どこが弱みか、強みかを評価しながら、さらに改善していくというのが学校経営品質の考え方です。この自己評価をしながら、外部評価も入れながら、自分のところをどういうふうに改善していくかというのが、このFD委員会の中でされていくと1つの方向性が出せるのではないかなというふうな気がします。学生さんたちを大事にしながら、学生のための大学であるという視点を忘れないFD委員会というのは、視点が非常に素晴らしい委員会ではないかなというふうなことで、評価をさせていただきながら話しておりました。

それから、次に将来的な点なんですけれども、まず1番目としまして、目標のこの冊子を作っていただきました。あの中間目標がこのPDCAサイクルで運営されていくのだと思うんですけれども、今後それをどういうふうに駆使してチェックしていくかということの研究を研究していただいて、さらにまとめ上げていただければな、というふうに考えております。それがまた、いわゆる学校自己評価の改善という点にもなっていくのかな、FD委員会にも絡めながらやっていっていただくと良いかなと思います。

それから、先ほどからも出ておりましたけれども、シラバスも良いものですので、そのシラバスを学生さんたちに読んでもらう工夫をしていただければなというふうな話も出されておりました。

それから、最後の学部長さんの話の中にありました単位の問題ですね。単位の上限の問題。これについては、やっぱり1つは議論の中で学ぶ意欲があるのではないかというふうな話もさせていただいたんですけれども、これは単位だけ、資格だけいっぱい取っていく。本当に情熱としての学ぶ意欲かどうかということを確認しながら、最低限度の必要な単位だけで良いのではないかというふうなことが話し合われました。そういった点で、確かに県の教員採用試験に合格するために、いろいろな単位を取っておいたほうがプラスになることはいっぱい背負い込みますけれども、本当に教育に対しての情熱から来ているのかということ、そのところをこんな勉強をして、こんな先生になって、こんな子どもたちにこんな教科を教えたいという思い。それが単位修得の基になっていくのではないかな、そのところを大事にしてもらいたいなというふうな気がしております。

それから、最後ですけれども、教師の弱さの話がありました。一貫してずっとその話が多かったんですけれども、教育の弱さという学校の課題は、この三重大学の課題でもあるのではないかという気がします。学校で起こっている課題を、それは知らないことだ、うちの大学では子どもたちに学力を付ける、知識をつけたら良いのだ、というのではやっぱり三重県の教師を養成するという段階ではないと思うんです。そういった点で学校の課題を大学の課題と位置付けていただきながら、その克服のための教育をしていただきたい。それが1つの方向性として出てきたのが実地研究ではないかという気がします。これを将来的にも工夫していただきたい。教職員の資質向上の鍵になりますので、いろいろと工夫をしてやっていただきたいと思いますし、先ほどの話にもありましたように、教授陣も学校と連携を取っていただきながら、どんどん足を運んでいただき、学校の課題を拾っていただくような形で授業作りの中に取り込んでいただきながらやっていただくと、学校の現場の教育も知っていただき、学生さんたちにこういうふうな教科、こういう教え方が必要だよ、ということをお教えいただけるのかなと思います。そういった点で、学校へ足を向けてもらうということも、よろしくお願ひしたいと思っております。

最後に、期待としまして、エールとしましてこんな意見が出ました。学校の先生を養成する先生方がここに集まってみえるのだと。いわゆる先生の先生なんだというふうな位置

付けがあるのではないか。大学にはそういった点で認識を新たにさせていただいて、良い教職員をつくっていただきたいなという思いを最後の話し合いの中で出された先生もありますので、そういった点を胸に置きながら、良い大学づくりに励んでいただきたいなと思います。雑っばくなまとめ方で申し訳ありませんけれども、意見を出していただいた中で掻い摘んで話をさせていただきました。

【司会 - 中島】 どうもありがとうございました。今、総合的におまとめいただきましたけれども、そのほかに委員の先生方からご意見がございましたら。よろしいでしょうか。

それでは学部長のほうから。

【山口(典)委員】 もう一つごめんなさい。ホームページのほうがやっぱり、情報の教育を持って見える大学にしてはちょっと残念かなというふうな気がします。そういった点で、やっぱりホームページの充実を先ほどの意見からもありましたように、「三重大学教育学部における課題と展望」のまとめ、「総括と提言」だけでも載せていただくとか、そういった工夫をしていただいたら良いという話をしていたんです。

もう一つ、これは駅等で配っていただいている「三重大X(えっくす)」の広報誌ですが、非常に面白いということで好評です。もっと宣伝をしていただいて、三重大学はここにあるんだよという、この広報誌も知らない方も多いと思いますので、そういった点でちゃんと持って来ていただいている方がおられましたので、紹介させていただきながらこういうふうな広げ方をさせていただければと思っております。非常に分かりやすく、見やすいというところで良いと思いますので。そういったホームページ作りもしていただきたいなと思っております。

【司会 - 中島】 はい、どうもありがとうございました。それでは講評を受けて学部長のほうから、よろしくをお願いします。

【丹保学部長】 長時間に渡って、本当にありがとうございました。今、いろいろなご指摘をいただきましたので、昨年度もいろいろなご指摘をいただきまして、それを具体的な行動に移しているという例もございます。

例えば、河南師範大学は河南省にあって三重県の、三重県と交流協定を結んでいるので、河南師範大学と提携を結んだらいかかというご意見がございました。そういう声に後押しされて、実際に今年の10月26日に調印をいたしました。このように皆さま方のご意見を深く理解して、こちらのほうで十分検討した上で実践したい、実現していきたいというふうに思っております。どうか今後も見守っていただきたいと思えますし、それからあれはどうなったんだというようなお叱りの声もいただければというふうに思っております。

これから、われわれは地域とともに歩まないといけない時代ですので、ますます皆さま方、今後の四日市市の教育委員会との連携の予定もございますし、それから地域の、本日来ていただいている南立誠小学校も非常に近い小学校でございますので、もっともっと密接に、学生たちがかなり自由に出入りし、われわれもかなり自由に出入りできるような、

そういうふうな学校にしたいと思っておりますので、今後もよろしくご協力を願いたいというふうに考えております。本当にありがとうございました。

長時間に渡って議論していただきましたので、私のほうからあまり長いごあいさつをいたしますとご迷惑ですので、この辺にいたしましてこの会をこれをもって終わることにとしたいと思います。どうもありがとうございました。